

温室

加藤文子

さいたま市から冬の厳しい那須に移住するにあたって、盆栽の温室が必要になった。

さいたままでは冬のあいだだけ、パイプを組んで簡易のビニールハウスを設置していた。庭が狭かったため、あらかじめ盆栽を移動させて棚を外しておかないと作業にのぞめない。たったひとつのビニールハウスなのだが、あれこれ準備が要った。

設営後ハウスの中に棚を用意して、盆栽の配置を考えながら納めて終了となる。

早朝からはじめても、まる一日かかる。前日から部材を揃えたり、段取りするので、予報が外れて当日雨になっても決行した。

春になれば解体して元の庭に戻す。出したり入れたり、作ったり解体したり、季節のたび十年のあいだおこなっていた。

温室ができればこうした作業はしなくて済むようになる。



参考に集めた建築雑誌に多様に工夫されたヨーロッパの温室、その生活を愉しむ人々の様子が紹介されていた。そんな情景にあこがれを抱いた。

どの程度の温室をつくったら良いのか迷っていたら、建築家のNさんがアドヴァイスを下さった。

結局、霜で持ち上がらないよう基礎を深く掘り、鉄骨を柱にアルミサッシを組み込んだしつかりした構造のものをつくることにした。

たくさん盆栽を収容するには二十坪以上の広さが必要だった。住まいの敷地より広いばかりでなく、費用も嵩む。私たちにとっては思いついた決断になった。

十二月、雪の降りしきるなか引越した。すでに温室が完成していたので、難なく盆栽を保護することができた。移住初日から温室の必要性を認識させられた。

隅を仕切って作業場をつくり、憩えるようにイスとテーブルも置いた。鉄の柱にはピンク、ウルトラマリン、白、黄色、いろいろな色でペイントした。窓ガラスの一部に白いペンキを塗って、アクセントをつけてみた。色を施しただけで、金属の箱のような印象がやわらいだ。

厳しい寒さや雪ばかりではない。春の嵐、台風、天井に遮光シートを渡してあるので夏の日ざしにも温室は対応してくれる。

天候に左右されずに仕事したり、談話もできる。

窓から吹き抜けるやさしい風を感じる時の心地良さ。窓を開けた瞬間、輝きに満ちた盆栽たちに出あう朝。夕やみの迫る間に金色に燃えるシーンも……。

温室に通う日々から、温室のある風景から数知れないよろこびや愉しみを受け取っている。年を追うごとに裕かなものになっている。



所々ペイントした温室の情景

撮影：加藤文子